

《実践報告》

表現活動における学びの深化の検証 (1)

一人形劇『ドロシーと愉快的仲間たち』制作上演の記録を通して―

永岡 都 (現代教育研究所所員 初等教育学科)

木間 英子 (現代教育研究所所員 初等教育学科)

早川 陽 (現代教育研究所所員 初等教育学科)

久米 ナナ子 (現代教育研究所研究員)

1. 1 概要

表現教育研究グループでは、2018年度からグループ所属の所員、研究員をメンバー¹としてプロジェクト研究「表現教育による〈深い学び〉の検証：パフォーマンス・アーツの制作実演を通して」を立ち上げ、学生による舞台制作やパフォーマンスを企画し、その指導を通して、学生が「表現とは何か」を学ぶプロセスの深化を記録する作業を進めている。

2018年度はプロジェクト初年度の活動として、子ども（幼児・児童）向けの人形劇『ドロシーと愉快的仲間たち』を制作し、大学祭で上演した。早川ゼミと永岡ゼミに所属する初等教育学科3年生12名²を中心に、題材の選択、脚本、舞台装置、挿入歌・音楽音響・効果音などを全てオリジナルで制作し、教員の指導のもと、練習と作業を積み重ねた。公演は、「昭和女子大学第26回秋桜祭」第1日目の2018年11月10日（土）に午前中1回、午後2回の計3回行われ、150名を超える来場者があった。

本稿は、人形劇の制作にあたり、演技指導（演出）、音楽・音響、舞台美術のそれぞれの分野から指導に当たった4人の教員が制作過程と学生の学びを振り返るものである。

1. 2 制作の過程

表現教育研究グループは、公教育における芸術教育の役割が変化し、コミュニケーションなど新しい観点から表現に対する関心が高まっている今日的状況を踏まえ、音楽、美術に、これまで教科教育に含まれてこなかった演劇やダンス（舞踊）を統合して、表現教育の新しい方向と広がりを探究することを目的としている。2017年度に「パフォーマンス・アーツの魅力³」というテーマで、演劇とモダンダンスのワークショップを開催し、それがきっかけとなって、学生たちが演じる舞台の制作・上演を企画した。

舞台美術家・演出家の久米ナナ子が脚本・演出・演技指導を担当し、音楽・音響を永岡都、木間英子が、舞台美術を早川陽がそれぞれ担当することにした。研究所所員である早川、永岡がゼミ生に呼びかけて上演仲間を募り、12名の学生が中心メンバーとして5月から打ち合わせに参加した。学生からは、子ども向けの人形劇をペープサートで行いたいという要望が出され、さらに日本や外国の昔話などいくつかの候補の中から『オズの魔法使い』が題材として提案された。

時間的制約もあり、脚本は、久米ナナ子が『ドロシーと愉快的仲間たち』として新たに書き下ろし、9月7日に教員が集まって舞台のアイデアについて協議した。今回は、観客層の年齢（幼児とそ

の親、児童)を考慮し、誰もが劇に集中できるよう、視覚的な工夫を凝らすことにした。すなわち、人形劇の舞台を左側面、正面、右側面の3面用意し、観客の視線を常に動かすようにしたのである。またペープサートの人形だけでなく、進行役の演者を舞台前の空間に登場させ、観客に直接話しかけ、やりとりをするようにした。9月下旬には学生が演じる配役がすべて決まり、音楽・音響を担当する学生も作曲の作業に入った。

10月からは「教育学演習Ⅰ⁴」の授業時間の一部を使って、役者による脚本の読み合わせ、舞台装置のデザインと音楽のサンプルの提示、ロードマップの確認を行い、10月中旬から具体的な制作と演出の指導を進めた。

(永岡都)

2. 脚本について

上演脚本を書くにあたって、まずは学生たちに物語を選ぶよう伝えた。初めて演劇体験をする学生もいるので十分に意見交換をしながら上演のイメージを膨らませてもらいたいと考えた。また、物語選択に先行して学生たちには上演形態をペープサートにしたいという思いがあった。授業や実習などで忙しいなか夏季休暇中に話し合いを重ね『オズの魔法使い』を希望してきた。

『オズの魔法使い (The Wonderful Wizard of Oz)』はライマン・フランク・ボウム (Lyman Frank Baum) の作品で1900年に出版されたものである。ニューヨークで裕福な家庭に生まれたボウムは、俳優・脚本家・セールスマンなど様々な職業をへて『オズの魔法使い』を書くことになる。1939年にはジュディー・ガーランド主演でミュージカル映画『オズの魔法使い (The Wizard of Oz)』として上映された。2018年度秋桜祭プロジェクトは『オズの魔法使い』を原案に学生たちが希望したペープサートを軸とした上演作品とすることに決定した。

脚本を書き出す前に、この劇を通して学生たちが子どもたちに何を伝えたいのかを問いかけてみた。作品の大切なテーマの核となるものである。学生たちからは、「魔法の力に頼らず自分の力で道を切り開いていこう」「欲しいものはすでに自分自身の中にあった」などが上がった。「子どもがワクワク・ドキドキしてくれたらうれしい」と軽快な場面展開を望む声も聞かれた。また、「オズが、ブリキにはハート、ライオンには星、かかしには本の形のバッヂをあげる」など演者と観客との触れ合いに発展するような意見も聞かれた。このように学生たちの多角的なアイデアを取り入れながら観客参加を盛り込み書き上げようと思い描くようになった。

脚本は劇作家の思いを描き表現するものであるかもしれないが、今回のプロジェクトでは、学生たちの意見やアイデアを手練り寄せながら、まずは舞台として具現化できることを最優先し場面を構成することした。

大学祭での上演ということもあり、開場から客だしを含めおよそ30分におさめる必要があった。『オズの魔法使い』という長編を正味20分程度の上演脚本にまとめるのは容易ではなかった。また、観客の大半は子どもたちなので若い想像力を心地よく刺激するようなことを心がけて書き進めた。幕開けなどから舞台美術で「魔女の足が飛び出す」などの劇的瞬間を書き入れ変化に富んだ展開にするように努めた。演奏や歌など音楽を気軽に楽しめて子どもたちが手拍子をとって歌える場面も積極的に取り入れた。

ドロシーが個性的な仲間たちと協力して困難を乗り越えて欲しいという気持ちを込めて、題名は

『ドロシーと愉快的仲間たち』とすることにした。

(久米 ナナ子)

3. 演出について

『ドロシーと愉快的仲間たち』のための演出アイデアは脚本の段階でその視点もいれながら書き進めていた。したがって大まかな上演イメージはすでに思い描いていたものであった。しかしながら、学生たちのモチベーションを保たせるためでもあるが、場面に応じて演出方法を変化させることも必要になった。稽古をしながらそれぞれのキャラクターを実演者が楽しく発見していくことは人前で表現していくうえでは大切な過程でもある。

演劇では「本読み」といわれるものがある。演出家と俳優は、「本読み」で芝居の流れを感じその劇空間を理解していく。脚本を皆で音読することは言葉を確認しながら身体表現（演技）に意識を変えていく重要な作業である。演劇を初めての学生もいたが、まずは参加者全員で『ドロシーと愉快的仲間たち』を音読することにした。

舞台は、紙人形のドロシーと仲間たちがオズに会うための旅を、学生演じる進行役が観客に筋書きを案内しながら進んでいく。ヴァイオリンが得意な学生を楽士としてその進行役と共に登場させることにした。音楽があつという間に境界線を越えるという素晴らしさが活かされ大変効果的であった。また、演出の大切なコンセプトのなかに大学内の一教室をドロシーが旅する舞台空間へ変化させたいという思いがあつた。しかし、ペープサートでは人形遣いが隠れる額縁が必要になる。額縁サイズが小さくなると観客との距離感が限られてしまうという弱点もある。演出的には旅をするドロシーとその仲間たちが自由に空間を往き来するイメージを強く表現したかったので、三方向にペープサート用額縁を設置することを舞台美術にお願いした。登場人物である進行役がその間を動きながら物語の展開に合わせ観客に台詞をなげかけるという趣向である。これにより観客の視線が一点に縛られず、教室であっても、ペープサートとして描くドロシーの旅をより一層身近に観客に感じてもらうことができるのではないかと考えた。

明るく楽しい音楽が流れるイメージが演出としてあつた。音楽がドロシーたちに勇気を与え、どんな困難にも立ち向かえるのだろう。オズの魔法使いへと導く黄色いレンガの道を、軽やかにドロシーたちが進む姿を音楽で表現したいと思ったのである。

進行役と楽士は客席を自由に動けることにした。そして、お揃いに近い白いギャザースカートがふわりとする衣装を着てもらふことにした。原作でアメリカの活発な女の子と描かれているドロシーを進行役に重ねリアルに感じてもらえるように考えた。また、楽士はシェイクスピアの旅役者のイメージを思い観客の前を横切り歩きながらヴァイオリンの演奏をしてもらった。舞台空間のなかでも紙人形劇と実演とのバランスは成功したのではないかと考えている。

終演に向けて、観客の子どもたちが参加して学生たちと交流するアイデアは今回のプロジェクト企画を考えた頃から演出のコンセプトとしてあつた。ドロシーの仲間たちが、それぞれに合った勳章を最後に受けるという学生たちからのイメージを受けて、旅の終わりのセレモニーとしても考えた。当初は子どもたちの反応が気になり演出としても不安はあつたが、幕をあけてみれば、舞台をみつめる子どもたちのエネルギーにその不安は消えあつという間に喜びに変わった。

このプロジェクトで、客席からの子どもの率直な好奇心にあらためて学ぶことが沢山あつた。脚

表現活動における学びの深化の検証 (1)

本・企画構成・演出をするものとして、たいへん貴重な機会でもあった。

演者、演奏者また人形遣いとして、観客の前で初めて演技する者もいるなかで、学生たちはそれぞれの分野で最善を尽くし協力しながら上演に力を注いでくれたと思う。3回の公演を終えて、素晴らしい表現の舞台を観客と共有する上演作品になったことを心から感じた。



写真1 観客と共に主題歌〈願いを叶えよう〉を歌う



写真2 進行役と楽士
(久米 ナナ子)

4. 音楽・音響

4. 1 使用楽曲・音響リスト

『ドロシーと愉快的仲間たち』で使用した音楽・音響は、効果音やテーマソングも含めて全てオリジナルの作曲・制作である。使用楽器はヴァイオリン、ジャンベ、フレームドラム、シンセサイザー (Roland JUNO-Di MOBILE SYNTHESIZER WITH SONG PLAYER) で、いずれも学生がライブで演奏した。(本文中の楽譜は楽曲のみとし、効果音は省いた。)

〈1幕1場〉

- ①音楽1「オープニング」: 人形劇の開始を告げる序奏。6/8拍子、ルネサンス時代のバスダンスあるいは東欧のフォークロアを連想させる曲調。ヴァイオリンとジャンベによる演奏。(楽譜1)

楽譜 1

♩. = 140

Violin

Vln. ⁷

Vln. ¹⁵

Vln. ²²

Vln. ²⁹

- ②効果音 1 「上から何か落ちてきた音」：シンセサイザー（以下、Synと略）GM Rhythm Set-ORCHESTRA 28の音源を使用。ト、変イ、イ、変口の4音を合成し、ルバープを切ってアタックを強くすることで勢いを演出、大太鼓のような振動音を出す。
- ③音楽 2 「黄色いレンガの道」：ドロシーたちの旅の音楽。ヴァイオリン独奏による楽しい曲調。（楽譜 2）

楽譜 2

♩. = 120

Violin

Vln. ⁶

〈1幕2場〉

- ④音楽 3 「主題歌 〈願いを叶えよう〉」：1コーラスのみ。登場人物全員で歌う。歌詞を先に作り、

それに曲付けを行った。Syn) Piano-Stage Grand (グランドピアノ音) の音源を使用。(楽譜3)

楽譜3

♩=120

F C/E Dm Am B^b C₇ F B^b/D C₇

そーきいよにいこうエメラルドのみやこへ ぎんーのくーつならせば ふしぎなけんは
そーさねがいかえようじぶんーのちからで ちえーおうきも ころも きみのなかにあ

F [間奏] B^b C₇ F B^b/D C₇/E F B^b B^b/D F B^b/D C₇ F D^b

じまる まほうなんか
る A/C B^b/D E A A B^b/D E A D/F

な く た ー つ す て き な き み な ら だ い じ ょ う ぶ す て き な き み な ら だ い じ ょ う ぶ さ あ ー ゆ こ う ぎ

E₇ A^b D^b/F D^b A^b

ん の く つ な ら し じ し ん と い う ま ほ ー う か け よ う

〈1 幕 3 場〉

- ⑤音楽4「エメラルドの都」：メタリックで透明感のあるサウンド。点描風の無調音楽。音源はSyn) WORLD-Neo Sitarを使用。インドのシタールを模した音色を、3オクターブ音域を上げて金属的な高音にし、さらにペダルで伸ばすことによってアタックのかかった残響を演出。空間の広がりを感じさせるようにした。
- ⑥効果音2「ドロシーたちが吹き飛ばされる音」：音源は、Syn) ORCHESTRA-Chamber Str2を使用。ストリングスのビブラートを強く効かせ、音域を3オクターブ下げてペダル音を踏みながら低音域から中音域までスライド（グリサンド）してクラスター効果を出す。ロングトーンからフェイドアウトする。

〈2 幕 1 場〉

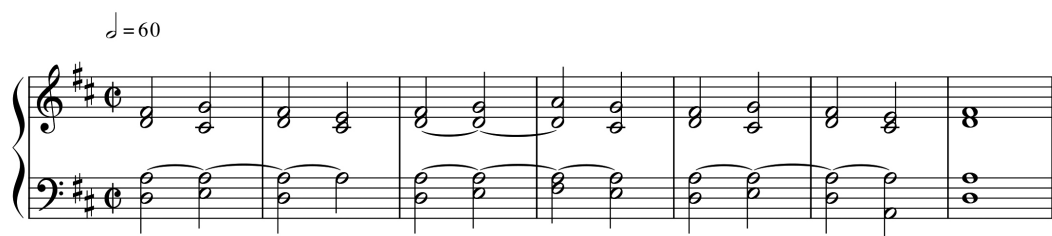
- ⑦音楽5「西の魔女」：魔女登場の際に流れる音楽。音源はSyn) ORCHETRA-Small Strを使用。3オクターブ音域を下げ、残響を多くする。魔女が迫ってくる不気味さを表現。
- ⑧効果音3「魔女に水をかける音」：フレームドラムの凹面に米粒を置いて、それを回しながら勢いのある水音を演出。
- ⑨音楽2「黄色いレンガの道」：ドロシーたちがエメラルドの都へ帰還する音楽として。

〈2 幕 2 場〉

- ⑩音楽6「オズの部屋」：落ち着いた広大な空間を連想させるために、教会の讃美歌を思わせる音

楽を作曲。音源はSyn) KEYBOARD/ORGAN-Positive Organを使用。ルネサンス～バロック期に用いられたポジティブオルガンの響きをイメージした。(楽譜4)

楽譜4



- ①音楽3「主題歌〈願いを叶えよう〉」：劇の途中から主題歌をピアノ音でBGM風に演奏し続ける。エンディングでキャストも全員挨拶に登場し、観客と一緒にサビの部分（予め開演前に楽譜を配布）を歌う。歌詞は第1幕と異なる。間奏を挟んで後半部分を（楽譜3）歌って幕となる。

4. 2 楽曲の制作過程と振り返り

音楽・音響制作に携わった学生2名はそれぞれキーボード、ヴァイオリンの演奏経験が豊富で、企画当初からモチベーションが高かった。9月25日と27日に教員と個別の打ち合わせを行い、音楽・音響のコンセプトについてイメージを固めた。両名とも楽譜上での作曲経験がないので、まず楽器で即興的に思いつくフレーズを演奏してもらい、それを教員が採譜して五線譜に落とし込み、さらに話し合いによって修正をかけながら楽曲に仕上げていった。

「オープニング」（音楽1）と「黄色いレンガの道」（音楽2）は、劇全体の雰囲気を作る重要な音楽であるため、演出と音楽担当の教員がイメージを擦り合わせ、進行役の衣装とも合うよう、ルネサンス風のダンス曲を独奏ヴァイオリンで生演奏することにした。また「オープニング」の音楽1は、上演前日にジャンベによるリズムパートを加え、東欧のフォークロアのような、より古風な趣を持たせるようにした。

「主題歌〈願いを叶えよう〉」（音楽3）については、人形役の学生に声をかけてテキスト（歌詞）を作ってもらい、それをもとに音楽・音響担当の教員と学生が曲付けをした。

伴奏音源は、Roland JUNO-Diに内蔵されている128のピアノ音源の中から最も実際のグランドピアノに近い音色を選んだが、その他の効果音1、2と音楽4、5、6の音源についても、学生が劇のイメージに合わせて上演直前までサウンド効果の調整を行った。楽譜4は、即興演奏されていた音楽6「オズの部屋」を後日、教員が採譜したものである。

学生にとってゼロからの楽曲制作は初めての経験で不安もあったが、フレーズ（短い旋律モチーフ）から音楽を立ち上げる方法や、明確な音楽様式（リズムパターンの反復）を下敷きにする方法、テキストの韻やリズムをベースにする方法、そしてサウンドイメージを明確にするなど、様々な作曲のメソッドを実際に経験することで、発想の幅が大きく広がり、ライブ演奏も含めて創造性を発揮することができた。

（永岡都）

5.1 舞台美術について

過去の久米の脚本・演出作品を知るために、2009年のロンドンでの舞台公演『Tanabata Star Festival』を映像で見た。ここから舞台の構成や展開、使用される小道具類を事前にイメージとして把握することができた。今回の舞台は保育、教育を学ぶ学生の人形劇であり、観客の多くが子どもであることから「興味関心を引くためには何が効果的か」を考えた舞台美術を計画することに努めた。打ち合わせの段階で人形の出る窓を3つに分割する案があり「場面を入れ子状に展開することで、視界の広がりにつなげることができるのではないか」と話が進んだ。また人形だけでなく、2名の学生が進行役や楽士として物語を進める展開となり、彼女らが入り出すための導線も確保する必要があった。

舞台の設置場所は前後に2つのドアのある、大学の普通教室である。教室から机椅子を搬出し、北側の窓は光を抑えるために大型のダンボールで全てふさいだ。また人形を操る学生が隠れる必要があったので、壁としての大きさを確保できる高さ2m、1面白色のダンボール30枚を材料とした。

別教室で1ヶ月前より制作を進め、期日間近にセットすることになったので、移動を考えて折りたたみ式にした。そして、舞台の壁を自立させるために、正面の他に左右に袖をつけ、折り込みを広げて立たせる構造にした。中央の壁下には穴があり、魔女の靴が飛び出したり、黄色いレンガの道へ接したりする。

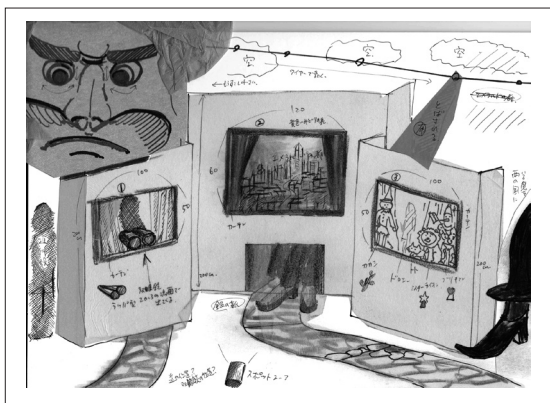


写真3 初期の舞台イメージ図

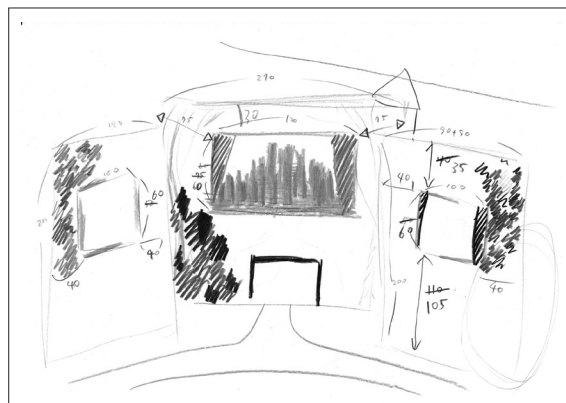


写真4 舞台イメージ図

3面の壁表面はアクリル絵具による塗装を行った。中央は幾つかの緑色をベースに樹木の絵を描き、左右はグレー調の無機質な色味とした。またそれぞれの窓には、大きな布を購入し、カーテンを設置した。カーテンのレールは園芸用の支え棒であり、フックは文房具の目玉クリップを利用した。窓の奥にはそれぞれの設定に合わせたイメージを描き、カーテンを開けた時に登場する人形の背景として色彩を加えている。



写真5 右側の窓のサイズを仮組みする



写真6 正面の窓の装飾を進める



写真7 黄色いレンガの道

5. 2 小道具の制作

- ①黄色いレンガの道（写真7）…約30メートルのサテン調の生地で、表面にアクリル絵具をローラーにつけてレンガを描いた。舞台装置の前を通り、廊下まで繋がる。
- ②西の魔女（靴/黒い衣装/マネキン/箒）（写真9・10・11）…魔女の気配を感じさせるために、マネキンに靴と黒い布、箒などを立て掛け、舞台の袖に自立させた。物語には人形の魔女も登場するが、観客にイメージとして伝えるために、実物サイズのオブジェとして設置している。

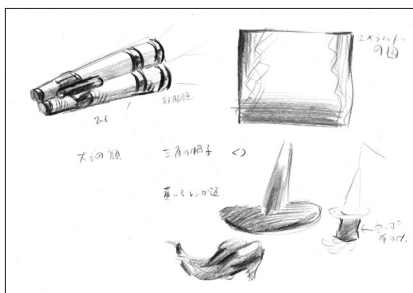


写真8 小道具のエスキース

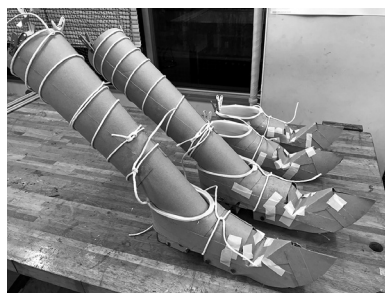


写真9 魔女の靴の組み立て



写真10 魔女の靴の彩色



写真11 魔女の靴



写真12 双眼鏡



写真13 人形とメダル

- ③双眼鏡（写真12）…主人公が遠くを見る際に使用する双眼鏡で、実物よりだいぶ大きく作った。光が照らせるようにライトを入れ、ボール紙をベースに、古く見える色彩を施した。
- ④人形（写真13）…人形劇の配役が決まってから、学生が自身で役の人形を作成した。両面に彩色

することで、表裏を返すことができた。舞台の窓が通常のペーパーサートより大きいので、人形のサイズに苦心した。

⑤メダル (写真13) …観客である子どもを参加させる際に使用する小道具の一つ。学生が自作した。

5. 3 照明と客席

大型照明2機は人見記念講堂で使用される持ち出し用のものである。カラーのセロファンが付属していたので、緑系のシートを選択した。高さをとって、スポットライトの熱と観客の距離を確保し、電源の取れる左右に設置、操作はゼミの4年生が1名で担当した。光は小道具の双眼鏡の中にもあり、その他に偏光型のLED照明はスポットとして窓の中に使用した。これは光量が限られ、全体を照らす際には、効果をなさなかったためである。

客席は教室の壁沿いに椅子を2列配置し、前には青い不織布を半月状にカットしてその上に直座りとした。子どもの観客が多かったので、詰めて着席することができた。舞台装置と客席の間には黄色いレンガの道と、役者が移動する導線を確保した。布製の黄色いレンガの道は約30mあったので、教室の外へ伸ばすことができた。



写真14 完成した舞台 (左側から)



写真15 完成した舞台 (右側から)

(早川 陽)

6. 上演当日の様子と学生の振り返り——協同による学びの深化

上演当日の3回の公演 (上演時間約30分) について振り返っておきたい。第1回公演は、11:30から楽士役のヴァイオリン演奏により開演した。観客は附属小学校低学年の児童が大半であった。午前だったこともあり観客数はそれほど多くなかったが、近接する子どもたちを前にした初めてのパフォーマンスは緊張度が高かったようである。台詞回しにぎこちなさが出たり、声量が十分でなかったり、語り・人形の動きと台詞・音響、この3者の間合いを、互いに確認しながらの進行であったので、全体がスムーズに流れるというには至らなかったが、滞りなく最後まで上演することができた。第2回公演は13:00に開演。この回は、夏休みの初等教育学科プロジェクト「夏休みの学習ワクワク・ウキウキ教室⁵」で、学生たちと交流のあった館山市内の小学生3年生から6年生の児童で満席となった。高校生も交じって前回よりも観客の年齢層が高くなったことで、舞台からの問いかけにひとひね

りある言葉が返ってきて演者が逆につっこまれるなど、想定を超えた即興的な面白さが加わり、劇を活性化させる効果的なアクセントとなった。学生たちは、第1回の公演を無事やり終えた自信もあってか、全体を見通して次を予測しながら演ずる余裕ができ、満員の観客席からの熱気に応えて声量も次第に大きく、それぞれの役柄に合った具体的な表現の工夫がみられた。第3回目は14:30開演、この日も満席となった。乳幼児を伴った家族連れが多く、親子で会話を楽しみながら舞台を見たり参加したりという和やかな雰囲気に終始した。集大成となる最終公演は、人形の動きと台詞の問合いがよく一致して見やすく聞きやすい舞台となった。音楽・音響も、場面設定にぴったりはまったりリズム感やテンポに落ち着き、劇空間は心地よい音で満たされた。また、客席の子どもたちと演ずる側との交感をもっとも充実した公演であった。進行役とのやりとりのみならず、人形の動きも子どもたちの反応に呼応して即興的な動きが加わり、フィナーレでは会場の一体感は最高潮となった。

振り返ってみると、3回の公演はひとつとして同じ舞台はなかった。脚本も演出も音楽も舞台美術も一応の完成をみて公演当日を迎えたのだが、その完成形と考えられていたものも公演ごとに変容していった。繰り返し上演することで演技が馴染み、演者同士のコミュニケーションが上達して表現に説得力が増していったことはもちろんであるが、加えて、観客の反応に即した表現の自在な動きにも目を見張るものがあった。公演ごとに観客は入れ替わるから、その都度会場を満たす雰囲気は異なる。演じる側は、それを無視して練習してきたことに拘泥することはなかった。観客の反応を敏感に感じるによって表現は変わるのであり、完成形は舞台上で常に更新されていく。つまり、表現者は受容者と共感することを通して、その都度の表現を決定していくのである。パフォーマンス・アーツを学生が体験することの重要な意義のひとつは、受容者との協同によって初めて表現が完成するプロセスを学ぶということにあったように思われる。

公演を終えて、このプロジェクトに参加した学生全員に感想レポートを書いてもらった。当初の戸惑い、意思疎通の難しさ、技術的な不安、しかし徐々に具体化していく舞台への期待、そして上演当日の緊張と高揚、ひとつのことを仲間と成し遂げた達成感がどのレポートからも読み取れた。それぞれに文章表現は違うが、同じ意識を共有していたこともわかった。以下、全員のレポートからくみ取れる今回のプロジェクトの成果についてまとめたい。

学生たちは、ほとんど演劇の経験がない。日本の公教育の教育課程で演劇が必須でないこともひとつの要因かと思う。どのように舞台が作り上げられるのか、どのように関わっていくのか、具体的なイメージがほとんどないままのスタートとなったので、最初も戸惑いも無理はない。しかし、制作を進めていく中で、舞台芸術は、決して一人ではできないことがわかる。多くの人間が絡み合うことで、それぞれの仕事がどのように他を生かしているのか、生かされているのかという相互連関の意識が明確になっていった。台詞、音楽・音響、大道具、小道具、照明、広報、どれをとっても孤立することなく、全体の中で、支え支えられながらその仕事を果たしていく。

それぞれの役割の技術的な向上は上演日が迫るにつれて目覚ましいものがあった。それは皆が実感していたことである。練習を繰り返し、試行錯誤を重ねて、完成度は飛躍的に高まっていった。そのエネルギーを後押ししたのは、自分のスキルを高めることが、他の表現をより一層豊かにし、子どもたちに楽しんでもらえる上質の作品に仕上げることにつながるという意識であったと思う。もちろん、一人一人の表現する力の向上が、それぞれの自信と喜びにつながったことはいまでもない。学生にとっては、総合芸術に関わる魅力に気付くことのできる長い時間をかけた体験となった。協同し

て成し遂げる過程に学びは大きい。言葉に出して対話するばかりでなく、他者の振る舞いをみて呼応し合う積み重ねが、協同の学びにはある。

そして、もうひとつ忘れてならないのが、学生の力を引き出させる役目を負った教員の存在である。文化芸術の分野においては、そこで専門的な仕事をする年長者との協同は、若年者の成長に大きな意味をもっている。長い歴史の中で確立された理論やメソッド、技術に学ぶべきところは多くある。それらを知ることによって、経験から導き出したアイデアを超えるものがあることに学生たちは気づくのである。その気づきが新たな発想へとつながっていく。学生同士の協同があり、学生と教員との協同もまた、学びを深化させる大きな原動力である。

今回の上演は、複数年にまたがるプロジェクトの第1年目の成果である。学生は舞台制作・実演を初めて経験して、パフォーミング・アーツが多様な表現手段の融合によって成り立っていること、演者と鑑賞者とが一体となって刻々生成されていく過程がすなわちパフォーミング・アーツであることを学んだ。これらの基本的な学びを元に、次のステップとして考えていきたいことは、様式（スタイル）を意識した舞台表現を学ぶことである。様々な表現を束ねて舞台に統一感を与えるのは、拠りどころとなる様式をもち、その意識を共有していることである。すべての表現者がひとつの様式感を共有しながら、それぞれの表現力を高めていくことを目標にして2年目のプロジェクトを進めていきたい。

（木間英子）

註

1. 昭和女子大学現代教育研究所表現教育研究グループは2018年度、所員3名、研究員4名が所属している。
2. キャスト・進行役：高橋咲（学生）、ドロシー：園部瑠奈（学生）、かかし：古木里奈（学生）、ブリキ：柳沢ちあき（学生）、ライオン：寺内志織（学生）、西の魔女：武田麻衣子（学生）、オズ・トト：松田奈子（学生）、脚本・演出・演技指導：久米ナナ子（研究員）、音楽担当：杉浦未菜（学生）・佐久間唯（学生）、舞台装置操作：鈴木あかり（学生）、舞台美術・指導：早川陽（所員）、音楽・歌唱指導：永岡都（所員）・木間英子（所員）、広告デザイン：栗原姫華（学生）・野本あき（学生）
3. 「パフォーミング・アーツの魅力」は表現教育研究グループが2017年度に実施したワークショップである。
4. 「教育学演習Ⅰ」は、初等教育学科の専門科目の一つで、3年生を対象としたゼミである。学生各自が関心のある専門領域に分かれて、卒業研究につながる研究を行う。
5. 「夏休みの学習ワクワク・ウキウキ教室」は、科目名称を「初等教育プロジェクト」といい、千葉県館山市にある昭和女子大学望秀海浜学寮で、館山市教育委員会と初等教育学科の共催で実施する教育プログラムである。初等教育学科の学生が館山市内の小学生約100名と3日間に渡って夏休みの勉強を一緒に行ったり授業実践を行いながら、館山市と交流を深める企画となっている。

参考文献

1. Lyman Frank Baum 『The Wonderful Wizard of Oz』 (Oxford University Press) 2008
2. ライマン・フランク・ボウム著、江國香織訳 『オズの魔法使い』 (BL出版) 2008

資料：脚本

ライマン・フランク・ボウム作 「オズの魔法使い」より
久米ナナ子 作・構成

「ドロシーと愉快な仲間たち」

1

平成三十年度 昭和女子大学
初等教育学科・現代教育研究所 秋桜祭プロジェクト

登場人物
進行役 高橋
ドロシー 園部
かし 古木
ブリキ 柳沢
ライオン 寺山
西の魔女 武田
オズ、トト 松田

音楽担当 杉浦、佐久間

舞台装置操作 鈴木
客入れ等

演出・演技指導 久米
舞台美術・指導 早川
音楽・歌唱指導 永岡

(3公演目 杉浦、佐久間、鈴木)

2

1幕1場 冒険の旅 「黄色いレンガの道」

注・ベープサート装置1(下手側) 2(センター) 3(上手側)

音楽1 イン オープニング

音楽1 フェイドアウト

効果音 何か落ちてきた音 「ドスン」

装置2 突然!魔法の足が飛び出る。銀の靴を履いている。

装置2の奥から観客の前に進行役が登場

進行役

進行役 ビックリして魔法の足を見る)

進行役 わゝ 魔法が潰されちゃった〜!!!

えっ!空から何か降ってきたの?

(進行役 空を見上げるしぐさ 次瞬間に観客に気がつき・・・)

あっ、ごめんなさい。

こんにちは

(観客に返事を求めるしぐさ)

今日は、とても元気な女の子の話をするわね。

その子の名前は!ドロシー!そして彼女の愛犬トト!

(説明のためドロシーとトトの絵を取り出して見せるのも良い)

彼女とトトは旅の途中で素敵な仲間たちと出会います。

そして、恐ろしい出来事も難しいことも

仲間達と一緒に乗り越えて行きます。

実はドロシーは大きな筆巻によって彼女のお部屋ごと

魔法の国「ここね」(進行役 装置2周辺を手で紹介して)

吹き飛ばされて来てしまいました。

(魔法の足を指して)

で、偶然にも悪い魔法を『このように』にやっつけることになつたのです!

でも、ドロシーは家族の待つお家^{おうち}にとても帰りたいのです。

(トト 進行役の言葉に反応して)

トト ワンワン! (故郷を思う鳴き声)

(進行役もトトの鳴き声に答えるように)

進行役 そこで、「お家に帰る」という彼女の願いを叶えてくれる

エメラルドの都に住む「オズの魔法使い」に会うため

3

魔法の靴、「この銀の靴ね」(魔法の靴を指して)を履いて黄色いレンガの道を歩き出しました。

音楽2 イン (冒険) 楽しい曲想

(進行役 黄色いレンガの道を歩く)

進行役 さあ、みんなもドロシーと一緒に冒険の旅をはじめましょう。

(進行役 左右の靴かかとを床で鳴らしながら装置2奥へはける)

音楽2 アウト

1幕2場 出会い ベープサート劇場

装置1・・・カカシ プリキマン ライオン登場

カカシ あのね、僕は頭が良くなりたいよゝ

脳みそによる知恵。誰か出来ないかなゝ

プリキマン 私は優しい心!愛することができ心が欲しいのです。

ライオン 俺には勇気が必要なのだ!勇敢なライオンになりたい。

3人とも あゝゝゝゝ (ため息と悩んでいる声)

進行役 (声) 黄色いレンガの道を歩いていたドロシーは、

カカシさん、プリキマンミスターライオンに出会います。

皆それぞれに叶えたいことがあるようです。

ドロシー(声) ねえ それなら私と行きましょう。

3人 えっ!君はだれ?

ドロシーとトト登場

ドロシー 初めまして 私はドロシー

音楽3 この銀の靴が行く先を教えてくださいわ

音楽3 イン 願いを叶えよう(全員での歌であっても良い)

願いを叶えてくれる「オズの魔法使い」に

みんな一緒に会いに行きましょうよ。

(トトの嬉しそうな鳴き声イン)

トト ワンワン

3人 ほんと〜すごい!ありがとう。一緒に願いを叶えよう。

音楽3 フェイドアウト

4

1幕3場 エメラルドの都

装置2…エメラルドの都 ↓ エメラルド色の国
エメラルド色の照明が装置2に

ドロシー、トト、カカシ、ブリキマン、ライオンはオズ大王に会う
装置2の幕が開くと大王の顔がどっしりとそこにある
大王は大きな目玉と口を持つエメラルド色の大きな顔

(大王 ゆっくりとした低い声で)
大王 わたしがオズじゃ！
この大王に願いを叶えてほしいというのは・・・
お前か~~~~ (声が部屋に響く)
(大王の目玉がギョロギョロ動く)
ドロシーは少し震えた声で)
ドロシー はい、私は家に帰りたいのです。
トト ワンワン!!!
(大王の面目は瞬きを2回大きくして)
大王 なぜ、それが自分でできんのじゃ?
ドロシー 私にはあなたのように魔法が使えません。
大王 だが、東の悪い魔法を消してしまっただけではないか?
ドロシー あれは、竜巻にあって・・・偶然だったのです。
(カカシ、ブリキマン、ライオンは
それぞれに願いを叶えて欲しい気持ちが先走って早口で大王に伝える)
カカシ あの、僕は、頭が良くなりたい・・・脳みそを、知恵をください・・・
ブリキマン 私には心を、愛することが出来る優しい心を・・・
ライオン 俺には勇気を！勇敢に暮らせるように！勇気を・・・
(大王 突然怒り)
大王 うるささい!!!!!! (大きな声で)
それでは、西の国にいる魔法を消し去るのだ!
そうしたら、皆の願いを叶えてやろう!
さあに西の国へ飛んでゆけ~~~~!!!!!!

ドロシー きゃ
トト ワンワン
カカシ あれれ
ブリキマン わわわ
ライオン うおおお
(ドロシー、トト、カカシ、ブリキマン、ライオンは 大王の怒りの声に
飛ばされて西の国へ)

5

2幕1場

進行役装置2の奥から登場

進行役 さあ、大変
ドロシー達はオズ大王に西の国へ吹き飛ばされてしまいました。
進行役装置3の前へ移動
西の国です。
ほら、あれが西の国の悪い魔法、意地悪そうでしょ！
進行役装置3奥にはける

音楽4 イン (西の国の意地悪な魔法の曲)
西の国の魔法登場
西の国の魔法 ↓ 意地悪そうな顔と風貌。
大きな三角の帽子 (できれば立体が望ましい)
音楽4 フェイドアウト
(魔法は観客に語りかける)
魔法 意地悪そうだと???

(不気味な笑い声)
魔法 うわっはっはっは、
今朝、おかしなことに空から降ってきたのさ
可愛い娘とちんちくりんの犬が・・・
ちようど召使いが欲しかったところにさ
あとは、なんだろうね？なんだか分からんものが
3体?? うん？ 3人???

魔法 しかも、その娘は長年私が探していた
あの銀の靴を履いているのだよ!
こんな都合の良いことはない!

(不気味な笑い声)
魔法 うわっはっはっは、
ありがたい。ありがたいね、
一石二鳥とはこのことだよ。

ドロシー トトとトトが登場
ドロシー ダメよ! この銀の靴は
(魔法に吹いて、トトは立ち向かう)
(魔法はドロシーとトトを追いかける)
トト ワンワン
魔法 わからない子だね。その靴をわたしに渡せば
ここで一生贅沢三昧に暮らせるのだよ。

6

さあ〜お渡しし!!!!!!
 (魔女ドロシーに飛びかかる。トトほえる。)
 カカシ プリキマン ライオン 装置1に登場
 ドロシー〜 ここにいたんだね!
 もう大丈夫だよ
 魔女は水をかけると溶けてしまうんだ!
 プリキマンがドロシーとトトをとっても心配して、
 絶対に君らを助けると、彼はとても愛情が深いよね。
 僕は牢屋に閉じ込められていたが、
 このカカシ君は鍵と魔女の秘密をみつけたのだよ!
 カカシ君 キミはとっても頭が良いのだよ!
 ドロシーのためなら、こんな魔女なんぞ少しも恐ろしくないとぞ!
 ほら!こんなに俺は吠えることができる。
 (とても勇敢なライオンの吠える声)
 ライオン うお
 (ライオンの吠える声にびっくりして腰を抜かす魔女)
 魔女 ひえ〜〜〜
 ドロシー わかったわ。この床磨きの水を魔女に・・・
 魔女 あ〜やめて、やめて〜 (悲しい声で) あ〜水はやめてくれ〜
 (魔女はあつという間に溶けていなくなる)
 全員 やった〜。これでみんなの願いが叶うね〜。
 トト ワンワン (嬉しい鳴き声)
 ドロシー さあみんな一緒にこの黄色いレンガの道をゆきましょう。
 オズの魔法使いに報告しよう。
 音楽2 イン 冒険の旅 [黄色いレンガの道]
 音楽2 フェイドアウト
 2幕2場 オズの魔法使い (オズの部屋)
 装置2…オズの部屋うすら明かり
 効果音 部屋には重低音が流れている。
 エメラルド色のカーテンが部屋全体に揺れている。
 部屋には誰もいない。奥には壁のような衝立が見える。
 ドロシー オズの魔法使いさ〜ん。戻りました〜
 トト 西の悪い魔女を退治してきました!
 ワンワン ワンワン
 オズさ〜ん、どこですか〜

7

プリキマン 西の国の魔女はいなくなりました〜
 ライオン うお〜〜〜
 ライオンの勇敢な声に奥の衝立が倒れる。
 衝立の奥には白髪のおじさんがおおきな双眼鏡を手に持って立っている。
 彼はドロシー達の方を驚いて見ている。
 ドロシー えっあなたはだれ?
 オズ ごめんなさい。みんながオズと思っていたのはわしのじゃ!
 全員 ええええええええええ
 トト ワンワンワンワン
 ドロシー あなたは魔法使いではないの?
 オズ わしは魔法使いではないのだ。
 実は乗っていた気球の綱が切れて
 このエメラルドの都にたどり着いた。
 この国の人々は空に浮かぶ大きな気球を見て、
 わしを魔法使いと勘違いしたらしい。
 けしてだますつもりはなかったのだ。
 (本当に悪いという気持ちを含めて)
 申し訳なかった。
 (全員とてもがっかりした声。泣いている声も聞こえる)
 ドロシー 私はお家に帰れないのね、ハ〜。
 トト クイーン
 カカシ 脳みそは無理か〜
 プリキマン 愛する心はもらえないのか〜
 ライオン うお〜勇敢なライオンにはなれない
 進行役 登場
 進行役 登場
 みんなはとてもガツカリしてしまいました。
 う〜ん、どうすればいいかな〜
 なんとかしてあげたいなあ〜
 (観客に応援を求める)
 ねえなにか良い考えはない?
 (観客からのリアクションも受けながら、答えても良い)
 オズさん。これはひどすぎるわ、何か良い考えはなかったの!
 (オズをとがめる)

8

オズ
 ほら、今日来てくれたみんなもこんなに怒っているわよ
 まあみんな聞いてくれ。
 わしはこの大きな双眼鏡でドロシー達が悪い魔女に水をかけて
 退治してくれたところ見ていたのさ。

(カカシに向かつて)
 カカシ君！きみはすでに素晴らしい知恵を持っているではないか。
 魔女は水で溶けるといふ秘密を理解し
 牢獄の鍵を見事に探し出したではないか。

(ブリキマンに向かつて)
 ブリキマンさん！あなたは魔女にこきつかわれるドロシーのことを
 とても心配した。その心は愛情に輝いていたさ。

(ライオンに向かつて)
 ミスターライオン殿！
 大空に響き渡るあの声は
 悪い魔女が腰を抜かしてしまうほど勇ましかった。
 あなたは誰もが認める勇敢なライオンなのですよ。

(全員に向かつて)
 みんな魔法など使わなくても、
 欲しいものを自分たちの努力で育てたのだ。
 人の力に頼らず自分で切り開いたのだよ。
 魔法などは必要ない。

そうかい
 そうなんだね。
 うお！

カカシ
 ブリキマン
 ライオン
 (オズが進行役に耳打ちをする)
 えっなに？ うんうん・・・(オズから聞いている)
 わかったわ。

(観客に)
 みなさん、オズには魔法はないけれど
 カカシさん、ブリキマン、ミスターライオンの
 素晴らしいさ、そして、自分の力で願いを叶えたことに
 カカシさんにはこのバッチ(木の形のバッチ)
 ブリキマンにはこのハート(ハート型の心)
 ミスターライオンにはこの星ね(星型の勳章)
 を贈りたいそうです。どう誰かオズに協力してくれる？
 (観客の中から子供3人ほど選んでキャラクターの胸に貼ってもらおう)
 ありがとう。拍手~~~~

(他の観客にも拍手をお願いする)

ドロシー
 みんな良かったね！
 ワンワン

トト
 さあ今度はあなたの番よ。

進行役
 ドロシー
 えっ！魔法がなくてもお家に帰れるの？
 大丈夫！このみんな全員であなたの願いを叶えるわ！
 あなたが勇気をだして冒険したことも、人を思う優しさも、
 すべて自分の力で育んだ素晴らしい心からですもの。
 さあみんな協力してくれるわよね！

進行役
 銀の靴のかかとを3回鳴らして
 ドロシーとトトをお家に帰してあげましょう。

進行役
 銀の靴を手に取り、上に掲げてかかとを3回鳴らす。

オズ
 カカシ
 ブリキマン
 ライオン
 イン エンディング(観客と共に歌える曲が望ましい)
 さようなら
 ドロシー！元気でね！
 また会おう
 うお~~~~

装置 カーテンが閉まる
 幕

カーテンコール
 学生達は全員キャラクターと共に装置の前へ
 音楽5を合唱
 観客にも歌ってもらうようお願いを
 観客には開演前に配られた歌詞カードなどがあると良い

進行役(または全員で) 本日はどうもありがとうございました。
 客出し
 音楽1 テーマ音楽 (観客が全員退出するまで続ける)

